

2-O-10

がん—この common disease を再考する

野村 秀明
関田 幹夫、瀬藤 晃一

【はじめに】医学の進歩は、平均寿命の伸長をもたらす一方で、疾患の罹患実態やその頻度を変化させた。特にがんは、今や2人に1人が罹る「ありふれた病気 (common disease)」となり、今後「がん罹患する」ことをどう考え、どう処すべきか、わが国終末期医療の実情を鑑みつつ考察する。【がん罹患と治療の現況】臓器毎のがん病態には多様性があるが、包括的にその罹患率を見ると、年齢を経るに伴って累算的增加を示し、生涯がん罹患率は0.5 (男性0.54、女性0.41) を超えるに至った。各種がん治療のモダリティ（手術療法、抗がん剤免疫療法、放射線療法）とその集学的治療により5生率は伸びたものの、がんが依然死因の1/3を占め「不治の病」であることに変わらない。【臨死について】臨床的に死に至る経過には①急性死 ②亜急性死 ③慢性死がある。いずれがよいかは個人により意見は分かれるが、臨終を多く見てきた私見からすると②が望むべき形である場合が多い。そしてこの②の形態を取るがん死は今後見直されてよいと考える。つまり、がん疼痛がコントロールされ、尊厳死が保たれるようになった今、がんで死ぬのも悪くない!【がん医療の今後】1981年のリスボン宣言では「すべての患者は尊厳をもって死を迎える権利を持つ」と述べられている。ケアよりキュアが先行する我が国終末期医療にあって、近い将来がんターミナルの患者が尊厳のもと静かに死ぬことが普通になる時代が来ることを確信したい。